

# 尼崎医療生協 2018年7月豪雨災害支援ニュース

第1号 2018年7月19日

尼崎医療生活協同組合

7月15日(日)倉敷市真備町にむけて第1陣の支援隊がボランティア活動を行ってきました。参加者は6名(看護師2、介護福祉士1、PT1、事務2)。以下、団長の三好看護部副部長からのレポートです。

6名でニュースでよく流れている面積の27%、4700戸が浸水した倉敷市真備地区へ災害支援に行ってきました。岡山県倉敷市災害ボランティアセンターまでバスの送迎が始まっています。センターの受入はスムーズでそこから、バスで各地域へ振り分けられました。私たちは今回、決壊した支流・小田川沿いから高梨川の川辺地区のテラト(入院患者全員が救出されたまび記念病院裏)へ派遣されました。そこからさらに各地域に移動です。朝からすでに35度以上の中、長袖・長ズボン・長靴・防塵マスク姿で土砂が乾燥した砂場状態の中を20分ほど歩くだけで汗が噴き出しました。地域では、住民の方が支援内容を申し出ておられ、随時10人くらいのグループで支援に出向きました。支援先は昔ながらのお屋敷のようで、男性は濡れた畳の運び出しです。すでに1週間が過ぎており、濡れた畳を持ち上げると、腐っておりぼろぼろとくずれました。枚数も何十枚もあり男性4人でも大変な作業でした。女性陣は台所の片付けで炎天下の作業ではなかったのですが、都会では考えられない程の季節や行事用の食器や調理器具が奥深くあり、全て水びたしで引っ張り出して、水を捨てに行きの繰り返しで帰りは腕がパンパンでした。昼にはテラトへ戻り休憩しましたが、体調が回復しないメンバーがでたため、安全を期してセンターへもどりました。看護師2人は救護班で住民の方への啓発が任務です。テラトに体調不良の住民の方の連絡が入り、同じく、砂場状態の中を20分ほど歩いて、そこからその方のご自宅まで移動です。土砂だらけのご自宅で横になっていただくのも困難でしたが、幸い熱中症の程度は軽症でした。連日の土砂出しや片付けで十分な睡眠がとれない中、支援の方に炎天下で指示だしをされていました。熱中症だけでなく、長靴を取ると、両足に靴擦れや外傷もあり、聞くと裸足で逃げたのと、ずっと、長靴ですごしていることによるものと思われました。大きな昔ながらの家は天井まで浸水し、家具は一切流され代わりに土砂が大量に流入していました。そのあと、私たちは川辺有井という地域で住民の方に氷嚢を配りながら熱中症の啓発を行いました。決壊した小田川の辺りは新興住宅地で比較的、今風の家で若い方が多く作業はすすんでいました。

感想では、支援者の熱中症の対応の割合が高かったように思われます。この日、真備地区だけで熱中症で搬送された方は27人でそのうち支援者は13人が占めました。支援に行ったメンバーも3.5lくらい半日で水分を取り、10分~15分で休息を取りながらの作業でしたが、冷却が上手くいかず、尋常でないほどの大量の汗と暑さがこもったため大変でした。

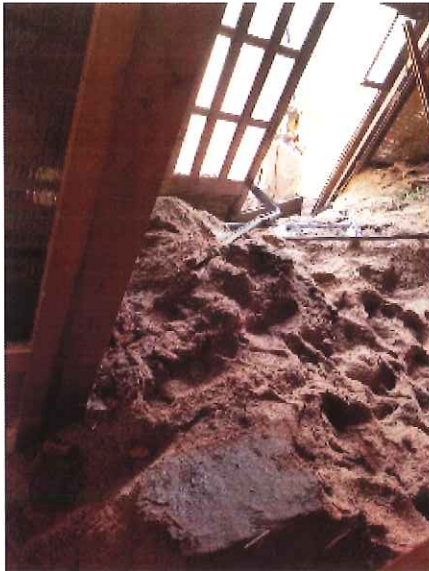
支援者は時間勝負のところがあり、災害地域の方も感謝されるので頑張ってしまうがち。支援に入る前の心得を侮ってはいけないとつくづく実感しました。まだまだ、多くの方の支援は必要で長期戦です。熱中症の対策を万全にして継続できればと願います。

なんとか、6名その日の内に帰って来ることができてよかったです。

道中、車の中から見た小田川には無惨に壊れた家々やなぎ倒された田んぼが続き、普段は水もちよろち



よろで夏は水遊びを楽しみ、いい所なんだと話を聞き、胸が一杯になりました。地域の方の話では、6日は、避難警告がでてでも車通勤なので早く切り上げることもなく仕事をしている方が多くあり、大きな災害がなく、「大丈夫」と胡坐をかいていたそうです。消防団の方は避難指示を流したが、高齢の方の避難が遅れたことを大変悔やまれていました。この地域のハザードマップでは2日間の規定降水量を超えると、多くが2階下まで浸水と想定されていたそうですが、その浸水地域に多くの避難所があり、途中で移動も余儀なくされたと聞きました。改めて、災害対策の重要性も痛感しました。



7/19 現在支援募金額 110,970 円